

名古屋市

西部地域療育センターだより

正面壁画「友情」より

No. 18

開設15周年を迎えて

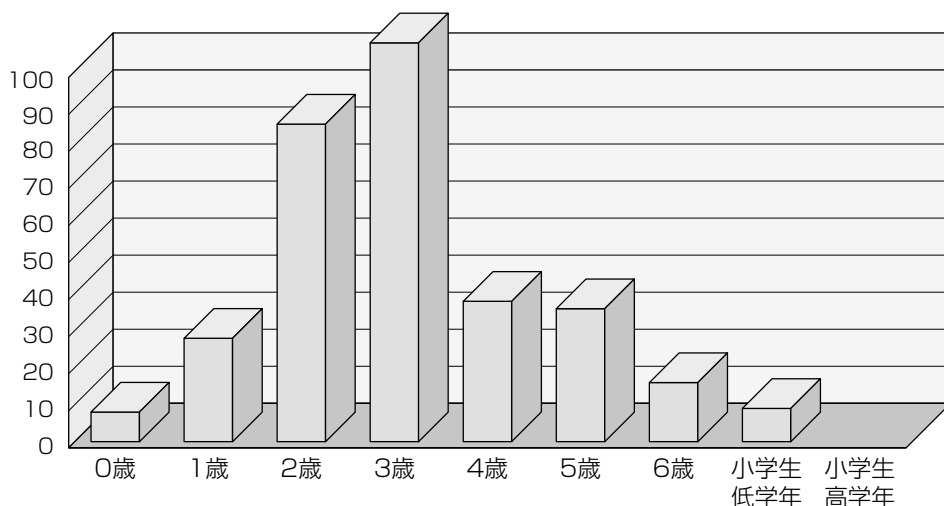
所長 鷺見 聡

今年も春が来ました。桜は例年と同様に満開の花を咲かせ、そして、西部地域療育センターは開設15年を迎えました。当センターは、名古屋市で最初の地域療育センターとして石川前所長のもとでスタートし、これまでに3千人以上のお子さんに利用していただきました。開設時の運営指針は「低年齢の重度・重複の障害乳幼児に対する早期療育の充実を図る」というもので、それは今も変わらず当センターの大きな使命です。さらに最近の社会情勢の変化に

伴い、「発達障害、あるいは、ちょっと苦手な面がある子どもたちへのサポート」という新しい役割も加わりました。現在も15年前と同じ敷地・建物で、職員数もほとんど変わっていないため、何かと手狭でご不便をおかけしたこともありました。しかしながら、工夫と努力の積み重ねによって、療育内容をより充実させることはできていると考えています。新たな未来に向けて、スタッフ一同とともに、一層の努力を続けたいと思っております。

平成19年度新規相談の概要(1)

年齢別新規相談件数



総件数
329件

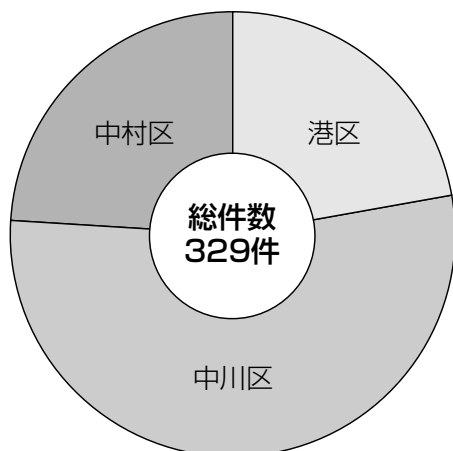
■年齢別新規相談件数

(単位:件)

年齢	就 学 前 児 童							小 学 生		計
	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	低学年	高学年	
計	8	28	86	108	38	36	16	9	0	329

平成19年度新規相談の概要(2)

区別新規相談件数



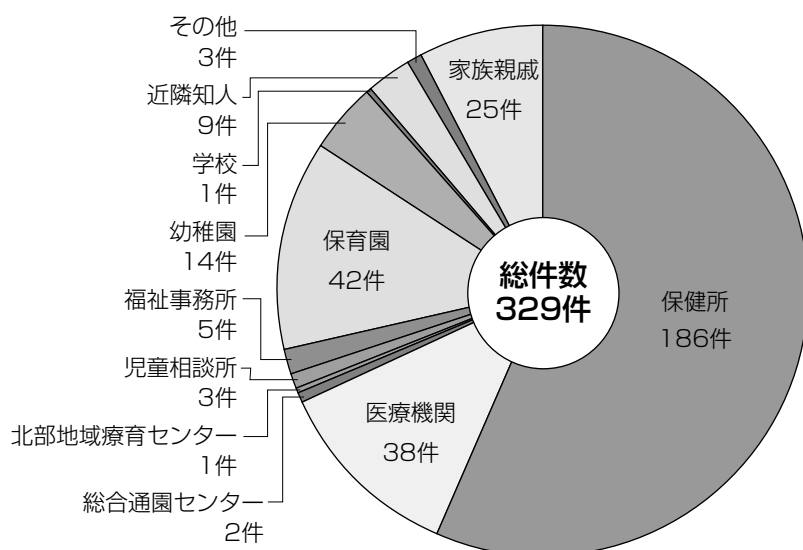
■年齢別・区別新規相談件数

(単位:件)

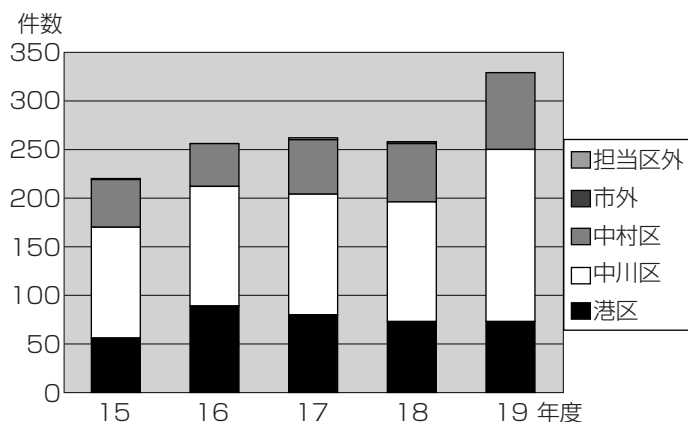
区	就 学 前 児 童							小学生	計
	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	低学年	
中村区	1	8	25	19	12	9	4	1	79
中川区	5	9	45	65	20	18	7	8	177
港 区	2	11	16	24	6	9	5	0	73
計	8	28	86	108	38	36	16	9	329

平成19年度新規相談の概要(3)

紹介経路別新規相談件数



過去5年間の新規相談件数の変遷



(単位:件)

区 \ 年度	15	16	17	18	19	計
中村区	49	44	56	60	79	288
中川区	114	123	124	123	177	661
港 区	56	89	80	73	73	371
市 外	1			2		3
担当区外			2			2
計	220	256	262	258	329	1325

— 困った行動への対応法：まとめ —

平成19年11月30日 西部地域療育センター所長 鷲見 聡（小児科医）

困った行動への対応法：まとめ

鷲見 聡



①はじめに

- 基本的な対応法（後述）

#子どもはひとりひとり違っているため、画一的に対応することに対して、批判的な意見もある

- 基本的な対応方法を参考に、それぞれの子どもに応じて、また、それぞれの場面に依拠て対応する

① はじめに、前置きを述べさせていただきます。発達障害といわれる子どもたちの問題行動への対応法については、これまでも、その情報を得る機会があったかもしれませんが、しかし、同じ診断名でもそれぞれ違いますし、同じ子どもであっても、その時々によって精神状態は異なります。したがって、どの子どもにも合う、どの場面にも有効であるという、絶対的な対応方法はありません。診断名に対しての画一的な、マニュアル的対応については、批判的な意見さえもあります。しかしながら、基本的な対応方法は、共通の苦手な特性をふまえて考えられてきた方法で、日頃の接し方の“ヒント”にはなると思いますので、これから基本的な対応法についてまとめたいと思います。既にご存知の点もあるとは思いますが、まとめ・復習だと思って聞いていただければ幸いです。

② わかりやすい指示を出す



- 言葉での指示をどこまでわかっているか？
自分で話す時に多語文で話せても、質問に対してはうまく答えられなかったり、相手の長いセリフを理解できない。
- 相手の言語水準にあわせた指示
短く、ゆっくり話す。
- 視覚的情報を併用 ジェスチャー、お手本
- 見通し、前もっての予告
瞬時に理解させようすると混乱しやすい。

② 困った行動をする子どもたちに対して、まず、わかりやすい指示を出すことが重要です。「大人の言葉での指示をどこまでわかっているか？」と考えて見てください。自分から話す時には多語文で話せる子どもであっても、質問に対してうまく答えられなかったり、相手の長いセリフを理解できないことは、しばしばあることです。したがって、相手の言語水準にあわせた指示を出す必要があります。短いセリフを、ゆっくり話すとう理解しやすいです。また、視覚的情報を併用すると良い場合もあります。ジェスチャーで伝える、お手本をみせる、絵カードを使うなどです。しかし、初めに述べましたように、同じ診断名でもそれぞれの子どものによって違いますので、例えば、絵カードが役に立つ子どももいれば、効果のない子どももおりますので、それぞれの子どものに合わせて工夫する必要があります。また、瞬時に理解することが苦手な子どもも多くいます。前もって予告して、見通しを持たせると、混乱せずに理解できる場合も多いと思います。

③ 気持ちを落ち着かせる

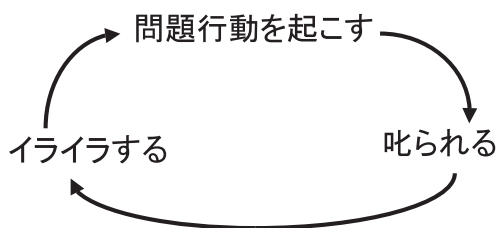
- 不安が強くなればなるほど、様々な問題行動は増える。
- 子どもにとって信頼できる大人がいると、不安が小さくなる。
- 大人がその子を嫌えば、子どもの気持ちは不安定になりやすい。
- 初めての時に、特に不安に陥りやすい。
(入園、クラス替え、担任の交代、行事)



③ 子どもの不安を取り除いて、気持ちを落ち着かせることも基本のひとつです。一般に、不安が強くなればなるほど、様々な問題行動は増えていきます。そして、もし大人がその子を嫌えば、子どもの気持ちは不安定になり、問題行動がさらに増えやすくなります。初めての時には特に不安に陥りやすいので、要注意です。例えば、入園直後、クラス替え、担任の交代、行事の時などです。普段以上にていねいに声かけなどを行って、気持ちを落ち着かせることが必要だと思います。

④ 悪循環を防ぐ

- 問題行動の悪循環

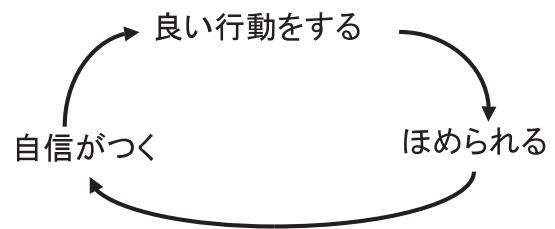


④ 問題行動を起こす子どもの場合には、周囲のサポートがないと、行動の悪循環に陥りやすいです。スライドに示したように、問題行動を起こして叱られっぱなしの場合、子どもはイライラして、ますます問題行動をおこしやすくなります。「ダメ」「いけません」という禁止の指示を連発する代わりに、「○○をしようね」と良い行動を促すことがひとつの方法です。例えば、バシバシと友達を叩いて気を

惹こうとする子どもに対して、「お名前呼ぼうね?」「優しくトントンしようね」と促せば、禁止の指示の連発をさけることができます。しかしながら、危険な場面では即座にやめさせる必要があります。この一線は譲れないということに関しては、毅然とした態度で接して良いと思います。

⑤ 好循環を作る

- 良い行動の好循環



⑤ 逆に、良い行動をすると、ほめられます。気持ちは安定しますし、自信もつきます。そして、また、良い行動をするという好循環にはいります。しかし、苦手な面がある子どもたちの場合、周囲が意識しないと、ほめられる回数が極端に少なくなります。それぞれの子どもなりに頑張っている点を見つけ出して、ほめてあげる必要があります。周囲の子どもたちの中には、特定の子どもに対してだけ甘い基準でほめることについて、不満を持つ子どももいるかもしれません。しかし、保育園・幼稚園のまわりの園児たちは、子どもたちなりに「A君は苦手なところがある」と理解し、そして、頑張ったことに対しては、素直に好意的にとらえていることが多いようです。「A君、今は良くできたね」と、その場で褒めてあげてよいと思います。小学校に入ってから、周囲との関係についてもう少し考慮する必要があるかもしれません。「周囲の生徒には特別な配慮と気づかれないように、さりげなく褒めることが腕のみせどころ」と述べられた先生もいるそうです。例えば、頑張っている時に、本人にのみわかるように微笑むということも、褒める方法のひとつです。どのような褒め方が一番良いかはケースバイケースですが、まず、支援する側がその子なりの頑張りを

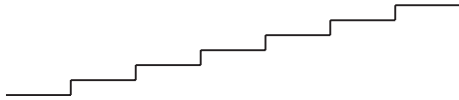
認めてあげることが大切だと思います。

⑥ 一段一段、スモールステップで



- その子にとって、目標が高すぎると
→ うまくいかない、叱られる、イライラする

- その子ができそうな小さな目標
→ うまくいく、ほめられる、気持ちが落ち着く



⑥ 行動の悪循環を防ぎ、好循環を作るための基本的な考え方は「一段一段、スモールステップで」という考え方です。その子にとって、目標が高すぎると、「うまくいかない、叱られる、イライラする」というサイクルに入ります。しかし、その子ができそうな小さな目標を立てれば、「うまくいく、ほめられる、気持ちが落ち着く」というサイクルに入ります。従って、できそうな小さな目標を見つけてあげることが大切です。先程の保育士の話でも、それぞれの子どもにあわせてスモールステップで進めていたと思います。「一段一段、スモールステップで」という考え方は、特別な方法ではなく、健常児も同様だと思います。ただし、発達障害児の場合には、その一段の高さを“低くする”必要があると考えてください。発達障害あるいは、何らかの診断名がついた児に対しては、何か特殊な方法が必要だと思われるようですが、健常児に対する保育・教育と共通する点も意外にあるのではないかと思います。

⑦ 勝手な行動、乱暴な行動



● 行動を3分類

- 1) 好ましい行動……ほめる、微笑む、ご褒美
- 2) 好ましくない行動…無視、黙認
- 3) 許しがたい行動…毅然とした態度で禁止

● 問題行動は、子どもからのサイン？

こどもの気持ちを読み取る

● どのようにしたら、参加できるか？

例：一部分だけでも参加させる

⑦ 勝手な行動、乱暴な行動に対して、行動を3つに分類すると整理しやすいといわれています。

1) 好ましい行動

2) 好ましくない行動

3) 許しがたい行動

という分類です。好ましくない行動すべてに対して注意をすると、ずっと注意ばかりすることになり、だんだん注意の効果はなくなりますし、一方、子どものイライラはひどくなります。迷惑はかからないが好ましくない行動については、無視したり黙認した方が良い場合があります。許しがたい行動、特に危ない行動については、毅然とした態度で一貫して禁止する必要があります。

問題行動が、子どもからの何らかの“サイン”である場合もありますので、子どもの気持ちを読み取る努力も必要です。「注意を惹きたい？」あるいは「関わられるのが嫌？」あるいは「できないと伝えたい？」と子どもは思っているのかもしれませんが。例えば「注意を惹きたい」気持ちだったら、迷惑のかからない注意の惹き方を教えてあげて下さい。「関わられるのが嫌？」な場合、一人で落ち着けるスペースを確保してあげると落ち着く場合もあると思います。子どもの気持ちに応じて、それぞれの対応方法を考える必要があります。

また、なかなか課題に参加してくれない子どもに対しては、一部分だけ、まず、参加させる方法があります。例えば、課題の最後だけやらせる方法です。最後からやらせるという方法は、水族館のイルカなどの訓練にも用いられている方法で、“達成感”を感じやすい方法です。しかし、逆に、最初の一部分の方が参加しやすい子どももいますので、その子にとって参加しやすい方法を考えてください。

⑧ 多動について

- 多動を助長している要因はないか？
刺激が多い、言われていることを理解できない、叱られてばかりでイライラしている
- できる目標をたて、一步一步
 - 1. 教室を出る場合、決めた場所へ行く
 - 2. 教室を出ない
 - 3. ある場面では着席する
 - 4. 常に着席する
 - 5. 周りの子どもに話しかけない
 - 6. 手足をごそごそ動かさない



⑧ ADHDの子どもについて、成長を促すための考え方についての心理士の講演がありました。ここでは、具体的な方法に触れます。まず、「多動を助長している要因がないか？」と考えてみてください。例えば、「刺激が多い」「言われていることが理解できない」「叱られてばかりでイライラしている」などです。保育園・幼稚園では課題内容、小学校では授業内容が難しすぎる場合、ますます落ち着きはなくなります。したがって、助長している要因がないかどうか、それを軽減できないかどうかを考えてみましょう。また、その子その子にとって、何とかできる目標をたて、一步一步進めることが重要です。例えば、教室から飛び出す子どもにとっては、ずっと着席して手足を動かさないことは、高すぎる目標ですので、できそうな目標を立てる必要があります。

⑨ かんしゃく、パニック

- かんしゃくを避けるための配慮
 - 1) 苦手な状況に追い込まない
 - 2) 見通しをよくして、混乱を避ける
 - 3) 安定した精神状態
 - 4) 兆しを捉える
- かんしゃくが起きてしまったら
 - 1) 落ち着いた口調で対応
 - 2) 場所を変える（落ち着ける場所へ）
 - 3) 危険がない場合、そのまま、放っておく
 - 4) 子どもによっては、抱きしめると落ち着く



⑨ かんしゃく、パニックを避けるための基本的な考え方です。まず、苦手な状況に追い込まないことがひとつです。大人になるまでには様々な状況に対

応できるようになって欲しいものですが、日々パニックを起こしている状況の場合は、まず、落ちついた生活を取り戻すことが先だと思います。見通しをよくして、混乱を避け、安定した精神状態を保つように配慮します。また、パニックの兆しをとらえ、気分転換させることもひとつの方法です。かんしゃくが起きてしまった場合、落ち着いた口調で対応する、場所を変える、危険がない場合、そのまま、放っておくという方法があります。子どもによっては、抱きしめると落ち着く場合もあります。

⑩ こだわり行動について

- こだわり行動には良い側面もある
 - 1) 好ましいこだわり・・・正しいルール、習慣
 - 2) 好ましくないこだわり・・・不自然な行為
 - 3) 困ったこだわり・・・日常生活に支障
- 一度パターンを覚えると修正しにくい
最初に好ましいパターンを覚えさせる
困ったこだわり→まじなこだわりに
- 精神不安定の時に、こだわりは強くなる
こだわり行動によって、気持ちが安定する



⑩ ひとつの行動パターンや、特定のものに執着するこだわり行動は、自閉症・広汎性発達障害の特徴のひとつとされているため、止めさせなければならぬ良くない行動と思われがちです。しかし、こだわり行動には良い側面もあることを忘れてはいけません。正しいルールや生活習慣に執着するとしたら、プラスの特性と捉えてよいと思います。一般に、発達障害の子どもたちは一度パターンを覚えると修正しにくいので、最初に好ましいパターンを覚えさせることが大切です。もし、困ったこだわり行動パターンに陥ってしまったら、一気にそのパターンをやめさせようとせずに、よく似た行動パターンに置き換えていくと、うまく行くことが多いようです。

また、精神不安定の時には、こだわりは強くなると言われています。このような時には、こだわり行動によって気持ちが安定することも多いので、本人にとってはプラス面もあります。こだわり行動をただちに止めさせることよりも、精神不安定の原因を考え、その原因の解決を試みるのが大切だと思います。

⑪ 困った行動への対応法:まとめ

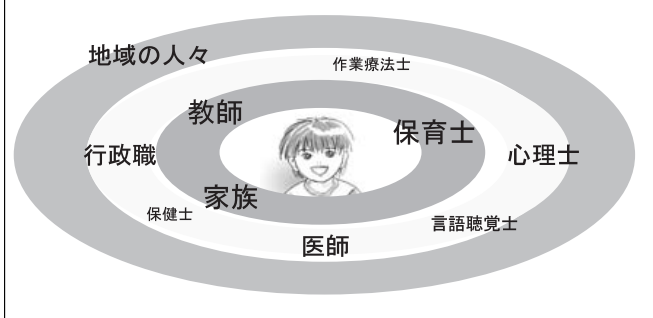
- 基本的な対応方法を参考に、それぞれの子どもに応じて、また、それぞれの場面に応じて考える。
- 頑張っている面を評価しながら、根気よくサポートする。



⑪ たとえ同じ診断名であっても子どもはひとりひとり違いますので、どの子どもにもあう絶対的な対応法はありません。したがって、対応法の基本を参考にしながら、それぞれの子どもに応じて、また、それぞれの場面に応じて、子どもの気持ちを考えながら対応していくことが大切であると思います。実際の場面では一筋縄ではいかないと思いますが、それぞれの子どもが頑張っている面を認めながら、根気強くサポートしていく必要があると思います。必ず、子どもたちは成長していくはずです。先程の保育士の講演を思い出して下さい。子どもたちは、それぞれ成長していたと思います。

⑫ 発達障害児への支援の輪を広げよう

医療支援モデルから社会支援モデルへ



⑫ 最後に、支援システムについて触れます。わが国では、1970年代より、肢体不自由児を対象とした療育システムが構築されてきました。肢体不自由児に対しても社会全体の支援が必要ですが、トレーニングの場所は医療機関が中心で、医療中心の支援システムといえます。発達障害の子どもたちに対して、

医療や行政関係者は、まず、肢体不自由児の療育システムを念頭において対応を考えたようです。しかし、そのシステムでは不都合があることがわかってきました。発達障害児は、多人数の人と関わるのが苦手ですので、集団生活で苦手な面を実践練習する必要があります。すなわち、人との関わりが苦手だからこそ、人との関係の中で成長を促す必要があります。また、肢体不自由児の頻度は千人に2～3人ですが、発達障害児の頻度は桁外れに高いです。最新の鳥取県の5歳児の調査で、ADHD・LDなどの疑い例まで含めると発達障害児の比率は約10%と報告されました。10人に1人とすると、「発達障害」という名称が妥当か？という疑問もわいてきます。私の個人的な意見としては、標準的な定型発達とは違うという意味で、「非定型発達」と総称する方が良いと思っていますが、いずれにせよ、医療関係者のみではマンパワーが全く不十分なことは明らかです。多方面からの、すなわち、社会全体からの支援がより重要だと思います。チームとして皆で支援することが大切で、それぞれの職種の特技を生かすことによって、大きな力になると思います。今日、心理士・保育士の発表があったことは、“皆で支援しよう”という視点からも良かったと思います。また、椅子が足りなくならないか心配になるくらい、多くの方々に来ていただけたことも、非常に心強く感じました。お忙しいところを連続講座にきていただき、どうもありがとうございました。

はじめに

2005年4月施行の発達障害者支援法では、『この法律において「発達障害」は自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるものをいう』と定義されました。

今回は「キレやすい子の理解と対応」（文献2f）というテーマを想定していますが、とりあえず衝動的な子にどう対応したらいいか、診断はどうあれ、現実に目の前にいる衝動的で、なかなか通常の説得が効を奏しない、“自分勝手”ですぐ手が出てしまう、あるいは暴言をしばしば口にしてトラブルが絶えないようなお子さんにどう対応したらいいか、考えてみたいと思います。AD／HDのある子、あるいは他の診断になっているけれど、AD／HDもあるんじゃないかという感じの子になんとか成長してもらいたい、そのためにはどうしたらいいか、という機会としたいと思います。

AD／HDはODD（反抗挑戦性障害）（表1）とも関連していて、AD／HDの内の何割かはODDに移行すると言われています。さらにODDの一部はCD（行為障害）（表2）に進展する可能性があると言われています。この頃では、幼稚園や保育園の年中～年長の段階でODDの段階に達している印象のお子さんはしばしばみられ、園の先生方も対応に苦慮されることが多いと思われます。ODDの段階で食い止めることができれば、CDに進展しないと考えられています。ですから保育園や幼稚園、あるいは小学校の早い段階でていねいに対応していくことは大変価値のあることだと思っています。

1. “個別的な認知能力” と “Executive Function”

【認知能力】

認知能力、あるいは知能とは何を指すのでしょうか。もし、それを発達検査や知能検査で測定されるものと定義すると、それは“かなり狭い能力”を指していることになります。知能検査の場面では、できるだけ注意が散漫になりにくい状況が設定されます。子どもは、対人関係についての負担（精神的緊張など）を検査者との間だけで求められます。AD／HDと診断されている子どもも、一定の状況では標準的な能力を発揮することがあり、したがって知能検査では正常範囲と測定されることがしばしば見られます。

【自己コントロール】

人間には、個別的な認知能力とは別に、「全体を統括・管理する機能」が備わっていると考えられています。それは“Executive Function”と呼ばれ、通常“実行機能”と訳されています。しかしその内実は“管理機能”と呼んだ方がふさわしいものです。『いますぐ、〇〇する！』という衝動を抑え、その実行時期を遅らせたり、より適切なやり方に変更したりする機能です。これが人間を社会的に適切に行動できるよう担保していることになります。

【個別的な認知能力の例】

例えば、積み木やパズルで建物や乗り物などを構成する能力があります。視覚－空間構成能力の一つです。これは文字を読んだり、書いたり、絵を描いたりする能力と関連しています。また例えば、自分の言いたい事を主張していく能力。聴覚－言語表現能力の一つです。相手の立場を危うくすることなど

に配慮せず、ひたすら自己に有利なように主張していく能力。これらは個別的な認知能力によって支えられています。

【機能局在】

個別的な認知能力は比較的早くから、その機能局在（脳における担当部位）が知られていました。例えば、視覚－空間構成能力は頭頂連合野が主に分担し、聴覚－言語表現能力は左側頭連合野が主に分担しています。

長い間、前頭葉が何を担当しているか分からなかったのですが、前頭葉（特に前頭前野）が実は“Executive Function”と関わりが深いことが分かってきたのです（表4）。アルツハイマー症においては、前頭葉の萎縮が明確に見られます。アルツハイマー症の初期には、個別の認知能力については目立った衰えが無くても、複数の認知能力を同時に活性化させ、維持を怠らずに作業をすることが困難になってくると考えられます。

2. 自己コントロールはなぜ必要なのか

【衝動・不安に対抗して生きて行くために】

人間はいつも衝動に突き動かされ、不安に脅かされる存在と言えます。ですから沸き上がってくる衝動や不安をどうやって抑えて暮らしたらいいかを求められています。そこで人間は次のような行動（サバイバル・スキル）を取るようになります。幼い段階のスキルからお話します。

a. 場所を占有したい、物を確保したい、お気に入りの遊具から他児を追い払いたい。

“生存のためのスペースを失うのではないかと不安”が背景

（…生き抜くためのナワバリ行動。確保できない時、深刻な脅威を感じます。対人関係で安心を得るというスキルが採用できないとき、その代わりに場所や物を確保しようとします。）

b. お気に入りの人＜B先生＞を確保したい。B先生と良好な関係を持とうとするC君との関係を切

断したい。C君に対して優位に立とうとします。“生存のための大人（後ろ盾）を失うのではないかと不安”が背景

（…関係性＜タテの関係＞を確保したいというナワバリ行動の発展型。自分がきちんと保護されていないということは深刻な脅威と感じられます。親子の関係に類似しています。あるいはB先生を確保するため、B先生に対して自分が優位にあることを示そうとします。時には威嚇して、威張って、実は劣等感にさいなまれそうな自分から離れようとします。威嚇や脅迫によってB先生の行動をコントロールできたら、B先生を自分の支配下においたことになります。）

c. クラス集団の仲間たちから、“いいやつ”だ、という評価を受けたい。仲間から孤立しないように気をつけたいといけない。対人関係の中で居場所が確保できれば、生存できると考える。“いじめ”はこの段階に達した者同士で行われます。“いじめ”の標的にされると生存できないと感じられます。

“生存権を保証される仲間の一員として認められなくなるのではないかと不安”

（…関係性＜ヨコの関係＞を確保したいという高次の社会性を保てる段階。ヨコの関係で形成される“群れ社会”の中で、一定の位置を確保したい。プライドを保てるかどうか、不安の源泉になります。）

【脳の処理能力を環境に対して最適にするために】

人間の脳には、処理できる能力に限界があります。環境からもたらされる、どの課題にどれだけの能力＜容量＞を配分するか、常に調整をし続けたいといけません。

a. 気が散る要素が排除された知能検査状況で、一種類ずつ課題に取り組むことは多くの容量を消費するわけではありません。よく慣れた課題を、よく知っている人達と、よく知っている室内で行うことは楽な事で、ほとんど容量を消費しません。

よく知っている人を相手に、よく知っている室内で、少しずつ変わった課題に取り組んでいくこ

とは集中して取り組みやすく、AD/HDの子も集中して時間を過ごすことができ、充実感を味わうことができます。

- b. 対人関係を維持することは、いろいろな作業の中でも、最も多くの＜容量＞を消費すると考えられます。したがって特に慣れない人と一緒に、慣れていない課題に取り組むことは非常に困難な状況ということになります。

対人関係を維持するには、相手が脅威にならないかどうか確かめる必要があります。

＜ヨコの関係＞を保つやり方を習得していない子にとっては、脅して支配可能であれば、そうしてしまった方が手っ取り早いことになります。限られた容量で対人関係を保つにはこれが楽な方法です（ただし短期的な見通しの場合にだけ成立する）。＜ヨコの関係＞を保つには、相手の性格や趣味、何が嫌で何が好きかを把握していないといけません。発達障害と呼ばれる子の多くは、他の人の個性について、それがどうなっているのか、把握することを大変苦手としています。それは自分の中に他者の視点を持つことができていないからです。他者の意図を適切に読むのが難しいのです。

発達障害を持つ子にとっては、ごくありきたりの日々の集団生活が負担になっていて、他の子どもではたいしたことのない小ストレスが大きな脅威となっていると考えられます。（席替え、お気に入りの場所を他の子にとられそうになった、先生から他児と手つなぎするよう言われた、活動の変わり目で自由遊びをやめるよう言われた、他児から非難の言葉を浴びせられた…）

また相手と会話なり共同作業なりを続けるときには、そのつどそのつど変化している表面に見えることばのやりとりや製作途上の作品の意味を解説し続けなくてはなりません。また表面のメッセージとは別に、隠された感情的意味合いを考え続けなくてはなりません。

こうしたたくさんの容量を消費してしまう状況で、ちょっとした新しい要素が出現すると、それは簡単に“処理しきれない不安”を導き出し、子どもを混乱に陥れることになります。例えば“生

存のためのスペースを失うのではないかという不安”が子どもを襲い、激しい防衛行動を導くかも知れません。

- c. いくつかの作業・宿題・仕事・付き合いなどの課題を期限付きで課されていて、それらをうまく処理できたり、やりのこしたり、忘れてしまったりしているのが人間の常の姿です。一つのことについては集中できても、それで容量を使ってしまうと、他の作業がおろそかになってしまうことが、AD/HDの子どもの場合、しばしば見られると言ってよいでしょう。もし大集団で複雑な対人関係を処理しながら、課題もこなし、次の時間の心構えもしておく、ということになると大変な容量を必要とします。まずは小さな集団で、定型的な作業をして、次の時間への見通しについては、プログラムカードを使って、いつでも目で見確認できるようにするとよいでしょう。

【覚醒の水準を最適にするために】

脳には覚醒の水準があり、その水準と処理できる課題のレベルは対応関係があるとみられます。課題や問題状況によって覚醒の水準をコントロールする必要があります。次に低いレベルの覚醒から順に高いレベルの覚醒へと説明します。（参考文献3bから引用）

- a. vigilance 覚醒、目覚めた状態。生物的意識。とにかく眠ってはいなくて、いつも通りの作業を行える程度の状態。習慣化した内容をほとんど自動的に（特別、意識せずに）行っている状態。
- b. awareness アウェアネス、気づき。知覚運動的意識。刺激を受け入れている状態で、外界のいつもと違う事物や現象に関心が向かっています。何かに「気づく」という働きを含みます。特定の事物に向かう志向的な意識（運動も含む）であり、ふつう目覚めて日常生活を送っているときのきわめてありふれた状況下での意識状態です。見たり聞いたり触ったりして知覚している状態およびその内的統合状態。
- c. recursive-consciousness 自己意識。意識する対象が、自分の意識そのものである場合でリ

カーシブな意識と言います。意識はそれ自身を意識できるという興味深い働きを持っています。デカルトの「我思う、ゆえに我在り」もこのレベルの意識をさしています。

羞恥心や自尊心（プライド）といった感覚は、おそらくcのレベルの意識状態が関わっていると思われます。多分、AD/HDの子どもはcの状態を長く維持することが難しく、誰かに「そんなことをして恥ずかしいと思わないの？」と問い掛けられても、自分の中でその意味をじっくりと吟味することは困難ではないかと思われます。意味を考えるよりも、その語調に迫害的な雰囲気に伴っていたら、きっと攻撃や非難を向けられたと勘違いしてしまうに違いありません。一般の子がbやcの状態であることが多いとしたら、AD/HDの子どもはaやbの状態であることが多いと考えられるのかもしれませんが、もちろんカウンセリングを工夫したり、薬剤によって、より高い覚醒状態が保てるようにしていくことは可能と思われます。

中枢興奮剤（メチルフェニデート）によって、問題行動が抑えられる場合が一定程度みられます。効果があるのはアメリカで8割、日本で2～3割とされています。（参考文献2b）前頭葉の抑制機能には脳内物質のドーパミンが強く関与しますが、このドーパミンがうまく運ばれない状態（神経細胞間を橋渡しする受容体がうまく働いていない状態）をこの薬剤が改善していると考えられています。

【記憶とプランニングのために】

人間の判断能力は、どれだけの過去の記憶を利用できるか、どれだけの未来の見通しを持って行動企画できるかによって、その適切さが規定されます。AD/HDの子は、注意の集中時間が短いために、お気に入りの情報はたくさん蓄積していきますが、努力や忍耐を必要とする情報はあまり蓄積されないとされます。社会的に体験した情報をきちんと蓄積し、利用可能な状態を保つことができれば（つまりリハーサルを繰り返せば）、自分の中で参照できる情報も多いと思われるのですが、これも限定されやすいと思われます。

G君が、H君の持ち物（例えばムシキングのカード）を見て、うらやましいと思いました。そして是非自分のものにならないかなと願いました。G君はH君に言いました。

「このカードは、ぼくが家から持ってきたものだよ」
H君はカードをG君に取り上げられそうになって…、（この後いろいろな展開があるかもしれません。）

いくら自分がその場を言い繕っても、結局は仲間から「G君は信用ができない、自分勝手な事を言うやつだ」という評価が定まってしまったら何にもなりません。しかし長期的な見通しを持つことができないG君は、しばしば短期的にしか有利にならない行動を選択してしまいます。（長期的な見通し… $M \Rightarrow N \Rightarrow O \Rightarrow P$ 、ゆえに $M \Rightarrow P$ 、短期的な見通し… $M \Rightarrow N$ ）

AD/HDの子はリカーシブな意識が働く時間が少なく、その分を大人が補ってあげる必要があります。大人はG君の行動を見ていて、すかさず「G君は、そのカードがとても欲しいと思っているんだね。でもG君はそのカードがH君のものだということを良く知っているよね。だから、ちょっとH君に頼んで貸してもらって、あとでありがとうと言って返せばいいんだよね」と声をかけます。するとG君は「うん、H君のだということを知ってるよ。H君、ちょっと貸してね」と言いました。大人の目・耳・口が教室に増えれば、行動が落ち着く可能性が高くなります。大人は“監視する”というニュアンスで存在するのでなく、できればリカーシブな意識を活性化させ、見通しに基づいた行動が取れるよう、促す役割を遂行したいものです。つまり子どもの足りない部分（Executive Functionの弱さ）の一部を補助してあげるという発想です。

AD/HDの子に強化子（よい行動をしたあとで褒めること）を与えるのは、一般の子のようなペースで与えていては効果が無くなってしまうと言われています。例えば一般の子なら、ある事象の後、20秒してから褒めても十分に効果がありますが、AD/HDの子の場合は、そのタイミングで言っても、もう違うことに関心が向かっていて、またはその事象のことは忘れていて意味が無くなってしまいます。ADHDの子には例えば事象のあと、5秒以内

に言わないと、効果が無いのです。

【自己モニタリングを確実に行うために】

人間の判断は、自分だけがしているのではなく、他者も行っていることに気が付くのは何歳のことでしょう。自分がある世界観を持っているが、他者もやはりなにがしかの世界観を持って生きている。それは同一とは限らない。そう感じることは幼児～子どもにとってそれこそコペルニクス的世界観の転換になります。ひょっとすると自分の持っている世界観は、自分しか感じていなくて、他の人は全く別のように感じているかもしれない。これは先程の“リカーシブな意識”による気付きに当たるわけです。

はじめに家族との間でその初期の行動が現れます。幼児は行動を一つ一つするたびに、母親の顔を見て、承認されているかどうか確かめることをします。親の不快そうな、あるいは暗い表情を見て、ある行動を取り止め、笑顔を見て別の行動を実行します。これを『社会的参照機能』と言います。一般の子どもには自然に備わっていきますが、一部の発達障害の子には、この機能の成熟が遅れます。何度も繰り返し明確に伝えないと“禁止”“してはいけないこと”が伝わらず、そのために近所の人から虐待と勘違いされることもしばしば見られます。

子どもが成長して行くと家族以外の人から、どう思われているかが気になるようになります。親の言う事をさっぱり聞かず、後から生まれてきた同胞を可愛がろうとしなかった子どもが、近所の子どもが同胞をいたわる姿を見て、急に上の子らしい振る舞

いをするようになっていきます。家族の中ではわがままな振る舞いをしていても、集団参加の場ではしっかりした行動を取るようになっていきます。発達障害の子では、集団参加の場においても、家庭の中であるのと同様の行動をしてしまいます。一般の子たちが、行動の準拠枠を家族から、集団に変更しているのに、発達障害の子ではいまだ準拠枠が“身近な大人”から、十分に変更できていないと言えます。

3. まとめとして

こうした社会的参照機能などの成熟の遅れはあるのですが、自分の行動は周囲からどう評価されているのか、チェックしながら行動するというスタイルが、次第に形成されていくことになります。衝動を抑制できれば、自己モニタリングをすすめることができるでしょう。また、認知能力の幅・奥行きを広げることができれば、効果的なチェックができるようになるでしょう。覚醒水準を高めれば、効果的に自己の行動を振り返ることができるでしょう。他の人達から、自分の行動がどう判断・評価されているか見きわめることができれば、適切な社会的判断・行動を保つことができるわけです。周囲の大人は、身近な子どもの様子を見て、今までにあげたさまざまな能力のうちで、どれを伸ばすことができるか検討し適切に関わって行ければ、子ども達の成長を促すことは可能だと思います。

(表1) DSM-IV、による反抗・挑戦性障害の診断基準

- A. 少なくとも6か月持続する拒絶的、反抗的、挑戦的な行動様式で、以下のうち4つまたはそれ以上が存在する：
- (1)しばしばかんしゃくを起こす
 - (2)しばしば大人と口論をする
 - (3)しばしば大人の要求、または規則に従うことを積極的に反抗、または拒否する
 - (4)しばしば故意に他人をいらだたせる
 - (5)しばしば自分の失敗、不作法な振る舞いを他

- 人のせいにする
- (6)しばしば神経過敏、または他人からイライラさせられやすい
 - (7)しばしば怒り、腹を立てる
- 注：その問題行動がその対象年齢及び発達水準の人に通常認められるよりも頻繁に起こる場合にのみ、基準が満たされたとみなすこと。
- (B、C、Dは省略)

(表2) DSM-IV、による行為障害の診断基準

A. 以下の行動のうち、少なくとも3項目が6か月以上持続する：	(9)故意に他人の所有物を破壊したことがある 嘘・窃盗
人や動物に対する攻撃性	(10)他人の住居、建造物または車に侵入したことがある
(1)しばしば他人をいじめ、脅迫する、威嚇する	(11)しばしば嘘をつく
(2)しばしば取っ組み合いの喧嘩をする	(12)万引きしたことがある
(3)喧嘩で武器を使用したことがある	重大な規則違反
(4)人に対して身体的に残酷だったことがある	(13)夜遅く外出する
(5)動物に対して身体的に残酷だったことがある	(14)2回以上の無断外泊・家出
(6)被害者と面と向かって盗みをしたことがある	(15)怠学
(7)性行為を強いたことがある	(B、Cは省略)
所有物の破壊	
(8)故意に放火したことがある	

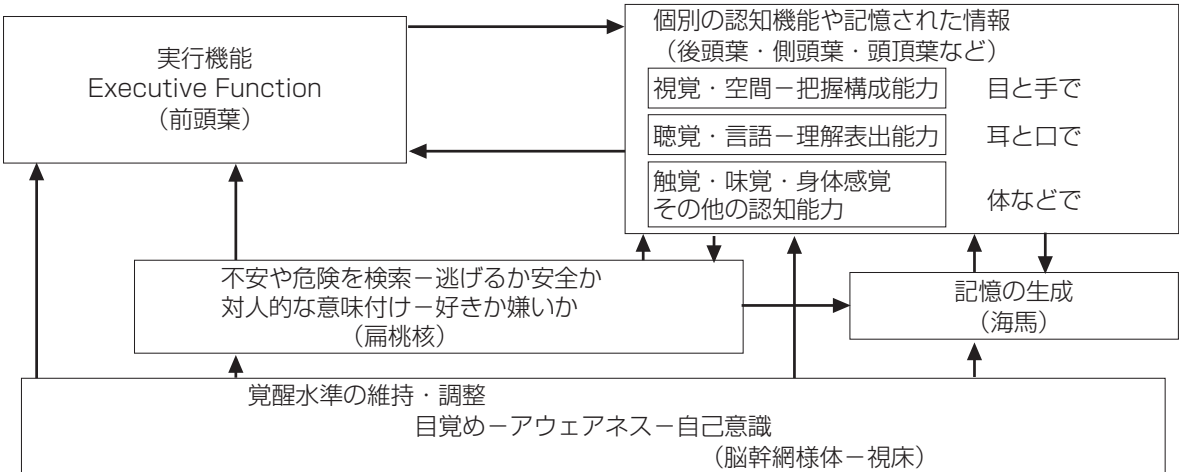
(表3) 3つの発達障害について

障害の違い・特徴	PDDのお子さんには「多動・衝動性が目立つ子」もいるし、逆に「動きはおとなしい、受け身型の子」、などのタイプがあるとされています。
広汎性発達障害 …PDD	
アスペルガー症候群 …AS	
学習障害 …LD	
注意欠陥／多動性障害…AD/HD	

	PDD			LD	AD/HD
	自閉症	AS	その他のPDD		
乳幼児期からの言葉の遅れ コミュニケーションの障害	◎	△	○	△	△
他者の意図を読めないなど想像 力や社会性の障害	◎	◎	◎	△	○
遊びが広がらない 物事に執着、手順などへこだわり	◎	◎	○	△	△
全般的学習能力に比して書字・計 算等で特異的障害	○	○	○	◎	○
社会的場面で必要なことに注意 を向け続けられない	○	○	○	△	◎
社会的場面で衝動的に行動 でそぞろ落ち着かず、多動	△～○	△～○	△～○	△～○	◎

発達上の困難さのニュアンスを ◎…強い ○…やや強い △…目立たない と表記します。

(表4) 実行機能と他の脳機能との関係



実行機能 (Executive Function) は司令官のような働きをします。

どの実働部隊を使って、いつ行動に出るか、
ずっと行動しないでおくか、
ほかの方法にするか、判断を担当します。
記憶情報や危険の程度を参照します。

個別の認知機能は実働部隊に相当します。

ここでは入力 (理解・把握) と出力 (表
出・表現・行動) の両方を含みます。

扁桃核は生命にとって危険が差し迫っているかど
うか重大な判断を担当します。

アラーム装置のようです。好き・嫌いなど

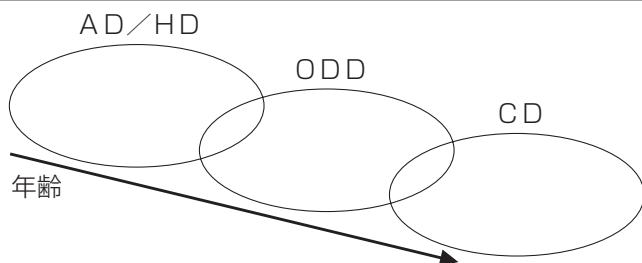
の感情と大きな関わりがあります。

海馬は記憶の貯蔵庫ではなく、生成するところです。

ずっと感覚刺激や情報が記憶されるように
働き続けています。機能しなくなると最近
の体験ほど思い出すことが難しくなりま
す。

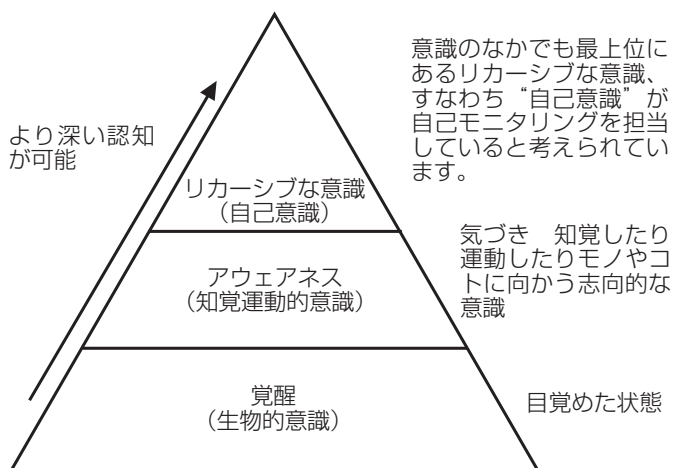
覚醒水準の維持・調整は、中世の軍隊では、太鼓
やラッパを鳴らす部隊に相当しているよう
に思われます。ここが眠ると、司令官も実
働部隊も記憶との照合 (見通しに基づいた
行動) も働かなくなります。電源とか発電
所に相当するとも言えます。

(表 5) AD/HDの一部はODDやCDへ



疫学研究によれば、AD/HDの30~45%は反抗
挑戦性障害を合併すると言われ、また、反抗挑戦性
障害と診断された症例の25~46%は、3~6年後の
再調査において行為障害と診断されたという報告も
みられます。(文献 2 a)

(表 6) 意識の階層構造 (文献 3 b)



参考文献

(1) SST・アサーション・認知行動療法関係

a 「学校における SST 実践ガイド 子どもの対人スキル指導」

編者 佐藤正二・佐藤容子 (2006年) 金剛出版
第 7 章<ADHDをもつ子どもへの SST>執筆 野呂文行

b 「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる小学校 ー楽しく身に付く学級生活の基礎・基本ー」 國分康孝監修 小林正幸 相川充編著 (1999年) 図書文化

c 「軽度発達障害児のための SST 事例集」 五十嵐一枝 編著 (2005年) 北大路書房

d 「アサーション トレーニング ーさわやかに自己実現>のためにー」

平木典子著 (1993年) 日本・精神技術研究所発行
金子書房発売

e 「現代のエスプリ アサーション・トレーニング その現代的意味」

平木典子編集 (2005年) 至文堂 小学校教育とアサーション・トレーニング、中学校教育とアサーション・トレーニングなどの項目もある。子ども達の行動・態度の変化、子ども達の意識の変化、学級の雰囲気の変化…等魅力的な説明もされている。

f 「子どもと若者のための認知行動療法ワークブック」

ポール・スタラード著 下山晴彦監訳 (2006年) 金剛出版

g 「子どものための認知療法練習帳」

著者ロバート・D・フリードバーグほか 訳者 長江信和ほか (2006年) 太洋社

(2) ADHD・アスペルガー関係

本田恵子著(2002年) ほんの森出版

a「現代のエスプリ ADHDの臨床 21世紀からのアプローチ」

石川 元編集(2002年) 至文堂

b「ADHD(注意欠陥/多動性障害)」 町沢静夫(2002年) 駿河台出版社

c「ADHDのペアレントトレーニング」副題-むずかしい子にやさしい子育て

シンシア・ウィットム著(2002年) 明石書店

d「現代のエスプリ アスペルガー症候群を究めるⅠ・Ⅱ」 石川元編集(2006年) 至文堂

e「アスペルガー症候群がわかる本 理解と対応のためのガイドブック」

クリストファー・ギルバーク著(2003年) 明石書店

f「キレやすい子の理解と対応」副題-学校でのアンガーマネージメント

(3) 脳科学関係、その他

a「脳科学と心の臨床」 岡野憲一郎(2006年) 岩崎学術出版社

b「脳とワーキングメモリ」 ^{おさか} 学阪直行(2000年) 京都大学学術出版会

c「脳のしくみ-まるごとわかる潜在能力」 泰羅雅登(2004年) 池田書店

d「感情研究の新展開」 編者 北村英哉 木村 晴(2006年) ナカニシヤ出版

e「記憶の神経心理学」 山鳥 ^{あつし} 重(2002年) 医学書院

f「いやされない傷」 友田明美著(2006年) 診断と治療社

g「精神分析事典」 編集代表 小此木啓吾(2002年) 岩崎学術出版社

～しょうがい乳幼児への関わり方～

～給食を食べないA君～

平成19年11月30日

～切り替えや言葉の理解が悪いB君

～切り替えの悪さ・こだわり・触覚過敏のあるC君～

西部地域療育センター 保育士 黒越 睦子

西部地域療育センター 保育士 村瀬 恵美

西部地域療育センター 保育士 片桐 有可子

連続講座で経過を発表することについて保護者の方の了解を得ましたが、さらに、匿名性を守るために細部を改変して発表させていただきました。ご協力下さいました保護者の方と、頑張っている姿を見せてくれた子どもたちに深謝します。なお、このセンターだよりでは、個々の経過はすべて省略し、課題内容とその対応方法についてのみ表にして示します。



課題	対応の仕方
給食を食べようとしない	お気に入りのお弁当箱を使用
大きい食材が食べれない	食材を細かくする
日課ができない	絵・写真で示して、生活の流れの見通しをよくする
言葉の理解が苦手	「×」のサインを、言葉と一緒に出す
自分の決めた行動パターン	大きな動きの中では認める
パニックが多い	本人の気持ちを言語化して受け止める
母以外はダメ	まず固定の職員をひとり作り、徐々に他の職員に広げる
トイレに入れない	遊びを通じて入る練習する

平成20年度 西部地域療育センター連続講座のご案内

第1回 講演会

講 師 名古屋市発達障害者支援室長 浅井 朋子（小児科医）
（児童福祉センター内）
「困った行動への理解と対応 ―広汎性発達障害を中心に―」
日 時 平成20年7月4日（金）PM3：30～5：00
会 場 西部地域療育センター1階 多目的ホール
対 象 保育園、幼稚園、小学校、療育施設、関係機関の職員のかた

第2回 通園部一日体験

日 時 ①平成20年8月25日（月）AM9：00～PM5：00
②平成20年8月26日（火）AM9：00～PM5：00
③平成20年8月28日（木）AM9：00～PM5：00
④平成20年8月29日（金）AM9：00～PM5：00
会 場 西部地域療育センター内通園部「キララ」
対 象 民間保育園・幼稚園の職員のかた

療育グループ体験

日 時 ①平成20年7月17日（木）AM9：00～12：00
②平成20年7月23日（水）AM9：00～12：00
③平成20年7月28日（月）AM9：00～12：00
会 場 西部地域療育センター療育グループ
対 象 民間保育園・幼稚園の職員のかた

第3回 講演会

未定

ボランティア募集

保育場面での手助け（室内の活動、園外への散歩など）
教材づくり
保護者活動時における療育児のきょうだいの保育
センター行事（運動会、夏祭りなど）のお手伝い
その他、園の環境整備など

■お問合せ・お申込み■

名古屋市西部地域療育センター